森鷗外と明清小説『情史類略』

――『舞姫』『うたかたの記』『雁』を中心に――

林　淑　丹

はじめに

森鷗外は幼い頃から、四書五経、左国史漢の素読に通うなど、幼い時から中国文学に親しんでいた。だが鷗外文学と中国文学の関連は、鷗外研究史の中でも最も手薄な分野と言えるであろう。鷗外が如何に中国古典文学と近代の思想を融合して自己の創作に反映させたか、という問題意識から研究を進めてきた。

鷗外の自伝的要素の濃い『キタ・セクスアリス』（『昴』第七号、一九〇七年九月）の中に中国の明清小説への言及があり、恋愛小説集の『情史』（『情史類略』とも言う）が取り上げられている。東京大学附属図書館蔵「鷗外文庫」に収められた『情史』には、圏点、傍点などが多く見られ、鷗外による書き込みが散見される。それらの書き込みと作品の世界がどう関わっているのか、関心を引く。『情史』には鷗外と関わりの深い小説集で、鷗外の作品『雁』（籾山書店、一九一五年五月）で言及した「小青伝」が巻十四の「情仇類」に入っている。また、歴史小説の『魚玄機』（『中央公論』第三十年第八号、一九一五年七月）の原典の一つとされる『三水小牘』に収録されている魚玄機の話が、巻十八の「情累類」にも見られる。『情史』は二十四巻もあり、鷗外がどういう方面に関心を寄せていたのか、明らかにするためには、この作品に照明を当ててみることが重要だと思われる。『情史』に「才子佳人小説」の話型が収められている。しかし、この「才子佳人小説」は特有の性格を持っており、先行研究でよく誤解される傾向がある。特に佳人像について、美貌でさえあれば「佳人」だと思い勝ちである。従って、本発表でその特色を明確にしたい。

『魚玄機』と「才子佳人小説」との関わりについてすでに拙稿「森鷗外『魚玄機』論――「才子佳人小説」を視点として」（お茶の水女子大学大学院人間文化研究科『人間文化研究年報』第二十五号、二〇〇二年三月）で分析した。そこでは『魚玄機』を、ある女性が「才子佳人」の理想を求めて挫折する物語として見直すことができた。本発表では引き続き、鷗外による『情史』への書き込みと鷗外初期の小説論をふまえて、『舞姫』（『国民之友』第六巻第六九号、一八九〇年一月）、『うたかたの記』（『柵草紙』第十一号、一八九〇年八月）と『雁』との関わりへと考察を進めたい。そこから、鷗外における中国文学の意味を探りたいと思う。

一

鷗外の自伝的要素の濃い『キタ・セクスアリス』には中国の小説に言及した、次のような一節が見られる。「僕」の十五歳の秋のことである。

> 恋愛といふものの美しい夢は、断えず意識の奥の方に潜んでゐる。初て梅暦を又借をして読んだ頃から後、漢学者の友達が出来て、剪燈余話を讀む。燕山外史を讀む。情史を讀む。かういふ本に書いてある、青年男女のnaivelyな恋愛がひどく羨ましい、妬ましい。そして自分が美男に生れて来なかつた為めに、この美しいものが手に届かない理想になつてゐるといふことを感じて、頭の奥には苦痛の絶える隙がない。（『鷗外全集』「第五巻」、一九七二年三月、岩波書店、一四一頁、傍点引用者）

ここで、中国の明の伝奇小説『剪燈余話』、清の才子佳人小説『燕山外史』と、明の恋愛小説『情史』が取り上げられている。鷗外の旧蔵本である『情史』と『剪燈余話』の中には圏点、傍点などが多く見られ、特に『情史』には鷗外による書き込みがたくさん残されている。それに対して、『燕山外史』には傍点や書き込みが一つも見られない。若き日の鷗外はこうした明清の恋愛小説を

どのように読んでいたのだろうか。鷗外による書き入れのある『情史』を考察し、それと鷗外の創作との関連について検証するのが、この発表の眼目である。

「鷗外文庫」の『情史』の版本は馮猶龍先生原本、詹詹外史評輯、立本堂蔵板で、恋愛に関する歴代の物語を記した小説である。秦の時代から明までの有名な恋愛小説が収められている。全二十四巻で、情貞類（巻一）、情縁類（巻二）、情私類（巻三）、情侠類（巻四）、情豪類（巻五）、情愛類（巻六）、情痴類（巻七）、情感類（巻八）、情幻類（巻九）、情霊類（巻十）、情化類（巻十一）、情媒類（巻十二）、情憾類（巻十三）、情仇類（巻十四）、情芽類（巻十五）、情報類（巻十六）、情穢類（巻十七）、情累類（巻十八）、情疑類（巻十九）、情鬼類（巻二十）、情妖類（巻二十一）、情外類（巻二十二）、情通類（巻二十三）及び情蹟類（巻二十四）のように分類して編纂されている。中に淫蕩な王者や貴族の生活に取材したもの（「情穢類」巻十七）もあれば、人間と神仙や亡霊との恋愛物（「情鬼類」巻二十、「情妖類」巻二十一）もある。また、「情貞類」（巻一）や「情縁類」（巻二）、「情愛類」（巻六）と「情痴類」（巻七）に、男女の忠実で一途な恋愛関係を描く話が多く収められている。鷗外の『雁』で言及した「小青伝」は巻十四の「情仇類」に入っている。また『三水小牘』に収録されている『魚玄機』の話が、巻十八の「情累類」に見られる。

『情史』は恋愛小説集であるが、「才子佳人小説」の話型も入っている。「才子佳人小説」とは、普通の恋愛小説と違って、優れた文才を持っていて風流を解する美男子と、聡明で文才のある美人との恋愛小説である。このような「才子佳人小説」の特色は次の三点に集約できる。①

第一に、「才子佳人」の形象である。才子と佳人は共に容貌だけではなく、優れた文才も求められる。ここでの文才は詩文の才を指していて、教養のあることを意味している。特に佳人がよく焦点づけられ、その資質が詳細に描かれている。絶世の美貌だけではなく、文才によって才子との精神上の交流を揃えていなければならない。

第二は、才子と佳人が「才」によって互いに哀れみ、愛を確かめ、「才」に

よって情が生まれるという点である。特に詩のやり取りは「才子佳人小説」で一つの大きなモチーフである。互いに詩によって愛を確かめる重要な特徴があり、詩文を通して精神的な交流を深める。また、二人の恋しい思いを書いた詩や手紙は、殆ど侍女や第三者を通して伝えられることになる。

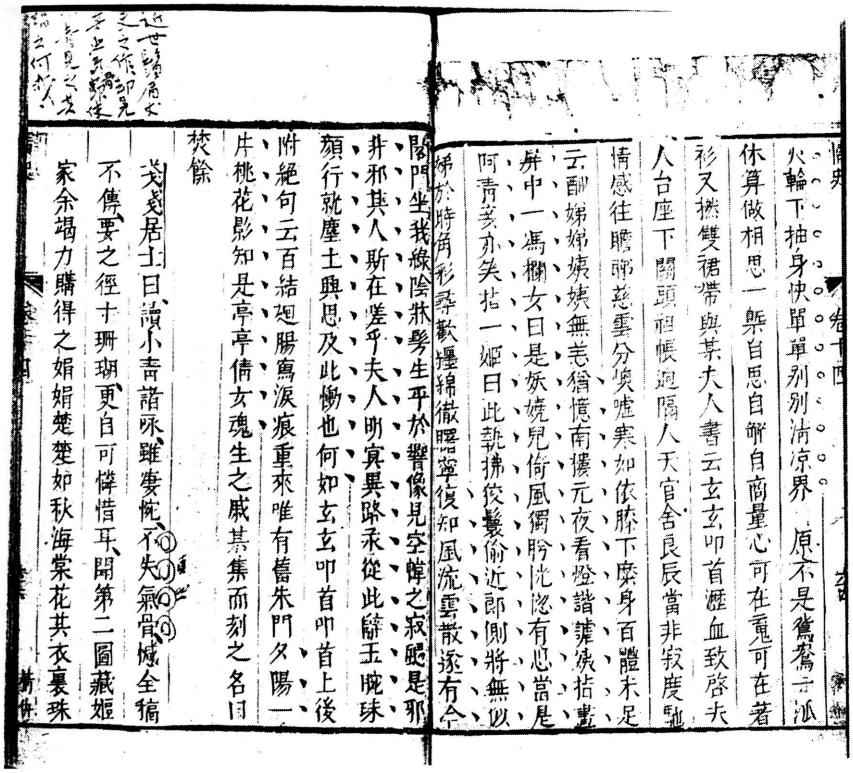
第三に、出会いの設定は一目惚れのパターンが多い。例えば、元の時代の有名な戯曲『西廂記』の第一章に書かれた男女の出会いのように、才子が佳人の「驚艶」（神仙に比されるほど絶世の美しさに驚く）に魅せられるというものである。筋の展開は情の哀切激越が特色で、二人の境遇は波乱万丈で、さまざまな災難を経て、ようやく結ばれ、ハッピーエンドで終わる。そこで男女の純粋で揺るがない愛を示す。

鷗外旧蔵本『情史』の序文から全二十四巻の本文に、鷗外の朱による傍点や圏点、書き入れが散見される。傍点や圏点だけが施されている作品もあるが、特に書き入れのある作品に注目すれば、それらの作品は殆ど才子佳人の話型だという点に留意したい。例えば、「姚月華」（巻三）、「朱淑貞」（巻十三）と「小青伝」（巻十四）などの話が挙げられる。

鷗外の作品『雁』で言及した「小青伝」は才子佳人の要素の強い小説である。小青は容貌が大変美しく、優れた文才を持つ気品のある佳人であり、ある金持ちの息子の妾になったが、正妻にひどく苛められ、僅か十八歳の若さで亡くなってしまう。巻十四の「小青」の欄外に、鷗外の朱による書き込みが残っている（資料一）。編者詹詹居士の評の箇所である。

近世鬚眉丈夫之作、却見骨其無氣節、使小青見之、其謂之何哉。

戔戔居士曰、讀小青諸咏、雖淒惋、不失氣骨（真然）、憾全稿不傳。要之徑寸珊瑚、更自可憐惜耳。聞第二圖藏嫗家、余竭力購得之。娟娟楚楚、如秋海棠花。（下略）



資料一

（詹詹居士が言う。小青のすべての詩や詞を読むと、悲しく感じられるけれども気骨を失っていない。残念ながら詩全部は残っていない。僅かしか残っていないので更に惜しむべきである。二番目の肖像画がおばの家に隠してあることを聞いて私は力を尽くして購入した。容姿が大変美しくしなやかで、弱々しく可愛らしくまるで秋海棠（植物名）のようである。）

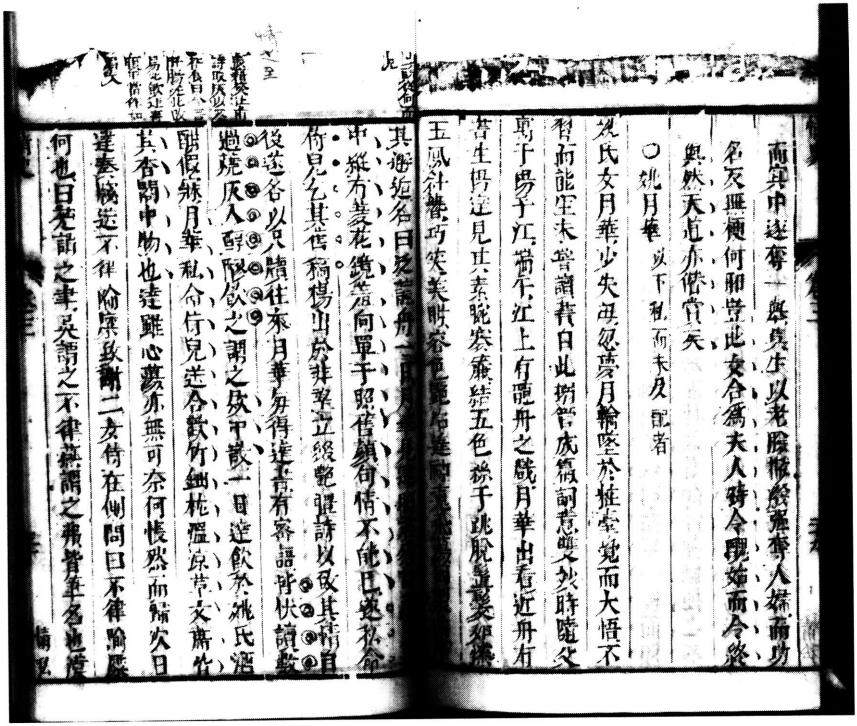
左の小さい字が鷗外の書き込みである。詹詹居士の評の中にも句読点が打たれ、「不失気骨」（気骨を失っていない）の側に「◎」が記され、「真然」（正に

その通りである）と書かれている。つまり鷗外は、小青の詩や詞に見られる「気骨」に注目した詹詹居士の意見に、賛意を示しているのである。また「近世鬚眉丈夫之作、却晃其無気骨（節）、使小青見之、其謂之何哉。」[②]（近頃の男の作は却って気骨がない。小青にそれらを見せたら、何と言うであろう。）の書き入れが見える。ここでは、自分がいったん書いた「気節」の「節」という字を斜線で消し、その上に「骨」という字を書き入れている。近頃の文芸作品は、男性のものでも「気骨」を欠いており、女性ながら大変な「気骨」の持ち主であった小青に見せたら何と言われるか、と皮肉っているのである。この書き込みから、鷗外が佳人小青の文才に注目し、賞賛していることが分かる。

巻三「姚月華」は姚月華と楊達との恋愛小説である。姚月華は幼い頃から利発で、卓越した文才を持つ美人である。ある日父親と竜船の試合を見に行ったら、楊達という書生が姚月華に一目惚れしてその憧れの気持ちをすぐに詩に表した。その後、二人の詩のやり取りが始まり、会ったりして恋情が劇的に進展したが、姚月華が転居したため、二人は再び会うことができなかったという話である。優れた文才をもつ美男子と、同じく聡明で文才のある美人とが、互いに詩を通して愛を確かめる姿が描かれている。こうした筋の展開はまさに「才子佳人小説」の典型である。鷗外手沢本の欄外に次のような書き込みが残されている。

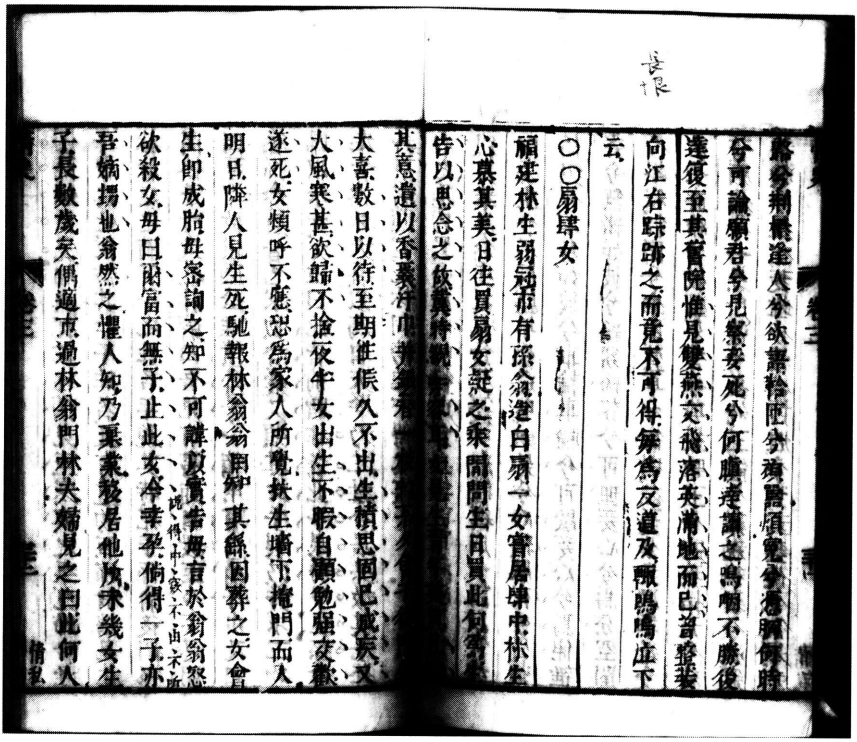
情之至　（略）月華毎得達書、有密語、皆伏讀数過、焼灰入醇醪飲之、謂之款中情。（姚月華が楊達の手紙をもらう度に、暗語があれば、必ず数回黙読し、その手紙を焼いて酒の中に入れて飲む。これを「情熱的な愛」と呼ぶ。）（「鷗外文庫」『情史』「巻三」、三〇頁、以下同）

「皆伏讀数過、焼灰入醇醪飲之」の側に「◎」が記され、欄外に「情之至」（愛情の至極）の書き入れが見られる（資料二）。また、話の最後で姚月華の行



資料2

方が分からなくなり、楊達が彼女に二度と会えずひどく悲しむ箇所でも、欄外に「長恨」（深い嘆き）と書かれている（資料三）。二人は詩を通して互いに思いを伝える。姚月華が楊達の詩を繰り返し読んでいて、彼の愛を頭で理解し味わうどころか、その手紙を焼いて酒に入れて飲むまで体でも味わいたいというのは、やや変わっていて珍しい行為だと思われる。しかし、姚月華が教養のある美人でありながら、よくそこまで楊達に対する恋しい思いを激しく表現した。鷗外は恋愛に対するそういう情熱に大変感心して、「情之至」の語を書き込んだのであろう。そして最後に二人は結ばれずに終わってしまったことが、実に残念で、悔いの残ることだと思い、「長恨」と評したのであろう。鷗外は特にこの話の悲劇性に惹かれたことも考えられる。若き日の鷗外が、とりわけそうした「才子佳人小説」に現れる男女の情熱的な恋愛感情や、純情的な愛に関心



資料3

を持っていたことが分かる。

また、巻十三の「朱淑貞」に見られる鷗外の書き込みは、佳人朱淑貞の詠んだ漢詩の横である。朱淑貞は小さい時から聡明で、衆に抜きんでた才能を持っている。しかし、夫が愚かで不細工なので、朱淑貞はその憂鬱な気持ちをすべて詩に託している。「今年元夜時、月與燈依旧、不見去年人、泪湿春衫袖」（今年の十五夜に、月と燈は昔のままであるが、去年に会った人はすでにいなくて、悲しい涙が袖を濡らした。）という詩を詠んだ。側に鷗外による「情致纏綿」（纏綿とする深い情愛）の書き込みが残っている。ここでの去年に会った人とは愛人のことを指しているであろう。鷗外は、朱淑貞の深くて情熱的な恋愛感情に感動して「情致纏綿」と書き入れたのであろう。

『情史』には淫猥な話や人間と神仙、亡霊との怪奇的な恋愛物も入っている。

しかし、鷗外の書き込みから、鷗外はとりわけ「才子佳人小説」の話型に注目したことが分かる。「才子佳人小説」でも特に関心があったのは、文才に優れた美男美女の間に生まれる純情で献身的な愛情表現と、恋に対して変わらない、忠実な態度を示したところだと理解できる。『キタ・セクスアリス』での「僕」の感想と照らし合わせて、若き日の鷗外は才子佳人の深くて情熱的で、哀切激越した恋愛感情に惹かれ、それを男女恋愛の理想と考えたのではないか。

二

若き日の鷗外のこのような関心は、具体的な創作にどのように反映されているだろうか。作品に着目して検討してみたい。

まず、『うたかたの記』を見てみよう。才子佳人の形象から考えると、巨勢は絵の才能があるのみならず、「拙からぬ独逸語」を話していて語学も堪能だと思われる。一方、マリイが初めて登場する場面を見ると、「年は十七八ばかりと見ゆる顔ばせ、エヌスの古彫像を欺けり。そのふるまひには自ら気高き処ありて、かいなでの人と覚えず」(「第二巻」、四頁)とあるように、最初から容貌の大変美しい女性だけではなく、「かいなでの」(ありふれた)人物ではないと提示している。モデルに適した立派な顔をしており、学識もある。養父母の雇った女教師に恵まれ、「三年が程に多くもあらぬ教師の蔵書、悉く讀みき。ひがよみはさこそ多かりけめ。又ふみの種類もまちまちなりき。クニツゲが交際法あれば、フムボルトが長生術あり。ギヨオテ、シルレルの詩抄半ばじゆしてキヨオニヒが通俗の文学史を繙き、あるはルウヴル、ドレスデンの画堂の写真絵、繰りひろげて、テエヌが美術論の訳書をあさりぬ」(一六頁)とさまざまなジャンルの本を読んでいた。マリイは美貌で且つ学識のある佳人と考えられる。

また、二人の出会うシーンに注目したい。巨勢がマリイと初めて会ったのは、十一、二歳のマリイの窮地を助けた場面である。マリイがすみれを売っている時、大学生らしい男の連れてきた大犬に突き当てられ、手に持っていた花篭を

落とした。「忍びて泣かぬ」マリイは砕けた残りの花束を力なげに拾おうとした時、そこの主に睨まれて追い出されてしまう。巨勢に声を掛けられ、マリイは初めて頭を上げ、「そのおもての美しさ、濃き藍いろの目には、そこひ知らぬ憂ありて、一たび顧みるときは人の腸を断たむとす」（八頁）とある。巨勢はこの「人の腸を断たむとす」るマリイの目に強く惹かれ、深く印象に残った。その後巨勢はマリイのことを忘れられず、「ローレライ」の絵のモデルにしようと思ったほどである。マリイも巨勢のことを覚えていて、六年後カフェーで巨勢と再会した時、「君の情の報はかくこそ」と言い、彼の額に接吻したわけである。才子佳人のように、二人は一回しか会ったことがなかったが、すぐに深い愛情で結ばれた。また、巨勢とマリイの絵（芸術）によって情が深まることは、才子と佳人が「才」によって互いに哀れみ、愛を確かめ、情が生まれるという特色に通じるものである。才子佳人が精神的な交流を求めるように、二人は絵によって精神面でも結びついていたのである。

また、鷗外が「才子佳人小説」で注目した、男女の情熱的な恋愛感情と一途さ、情の哀切激越という特色は、『うたかたの記』にも見られる。マリイは情熱的な恋愛感情を持ち、懸命に生きようとしている。カフェーで大胆に恩人巨勢の額に接吻した行為が皆を驚かせる。その後、巨勢を誘い、スタルンベルヒ湖へ行く節では「あはれ二人は我を忘れ、わが乗れる車を忘れ、車の外なる世界をも忘れたりけむ」（二〇頁）と、マリイと巨勢はすべてを捧げて情熱的に深く愛し合っている姿が描かれている。

このように、『うたかたの記』には、鷗外が若き日に関心を寄せた才子佳人の理想像を見出すことができる。

三

次に、『舞姫』と『雁』に「才子佳人小説」的な要素が見出せるかどうか、検討してみよう。才子像に着目すれば、『舞姫』の大田豊太郎がそれに当てはまると考えられる。豊太郎は幼い頃から優等生である。「旧藩の学館にありし

日も、東京に出でゝ予備校に通ひしときも、大学法学部に入りし後も、大田豊太郎といふ名はいつも一級の首にしるされたりし」（「第一巻」、四二六頁）とあるように、小さい頃から卓越した能力を見せている。洋行の官命を受けるほど、優れた学識と才能を持っている才子と言える。しかし、佳人の造型から考えれば、エリスは美貌であるとはいえ、聡明で優れた文才を持つ、教養のある女性とは考え難い。エリスは「父の貧しきがために、充分なる教育を受けず、十五の時舞の師のつのりに応じて、この恥づかしき業を教へられ」（四三四頁）たという。初めて豊太郎を家に連れて帰った時、「少女は少し訛りたる言葉にて云ふ」（四三二頁）と書かれている。豊太郎と交際してから、「余が借しつる書を讀みならひて、漸く趣味をも知り、言葉の訛をも正し、いくほどもなく余に寄するふみにも誤字少なくなりぬ」（四三四頁）というように、外国人の豊太郎に発音や文字などを直されるまで、正規の教育を受ける機会もなかった。踊ることはできるが、「恥づかしき業」なので、学識のような教養とは異なる。文才や教養があることは佳人として不可欠な条件なので、そういう意味で、エリスは佳人だと言い難い。つまり、エリスは中国の「才子佳人小説」での高い教養を持つ佳人のあるべき姿とかなりずれている。厳密に言えば、佳人不在の小説は「才子佳人小説」だと考えにくく、『舞姫』は即ち「才子佳人小説」だとは言い難い。

平岡敏夫氏は『舞姫』と「才子佳人小説」の『燕山外史』との関連を論じ、豊太郎とエリスとの出会いが「才子佳人の奇遇」のパターンに当てはまり、エリスを「佳人」として見ている。[3]『燕山外史』は、清の陳球の作で、竇緄祖とその妻と、竇緄祖の愛人である李愛姑の間の葛藤を物語る才子佳人小説である。『キタ・セクスアリス』にもその名が出ている。因みに「鷗外文庫」に収められているのは、清の陳球の撰、項震新などの校正で、光緒二十七年（一九〇一）上海申昌書局石印本の版である。鷗外による傍点や書き込みは見えない。平岡氏の論文では、「才子佳人の奇遇」の語が繰り返し使われており、論文のサブタイトルは「才子佳人の奇遇を中心として」となっている。しかし、この語に

二つの問題がある。一、果たして『舞姫』は「才子佳人小説」と言えるのか。前述したように、エリスは聡明で教養のある「佳人」とは言い難い。『舞姫』は中国の「才子佳人小説」の話型とずれがある。二、「奇遇」という表現である。氏は男女の出会いの場面について、「雨宿りの宝生が愛姑を見出すという才子佳人の奇遇となっている点で、古寺の扉の前というちがいがあっても、「舞姫」と同じ才子佳人の直接の奇遇なのである」[④]と述べている。しかし、「奇遇」の概念はもともと伝奇小説から来たもので、ある男性が天女に出会って恋に落ちたり、狐や龍から化けた女性と恋愛したりするような、普通では考えられない不思議で珍しい体験のことを指している。[⑤] 前述したように、「才子佳人小説」での男女の出会いは、殆ど互いの比類のない美しい容姿と卓越した文才に惹かれて一目惚れしてしまうという類型を特色とする。それは「才子佳人小説」の一つの大きな、且つ重要な特徴である。「才子佳人小説」の場合は、「奇遇」というより、「偶然に出会う」の意味合いが強く、「偶然にも素晴らしい出会いがある」、あるいは、才子が「偶然天女に比されるほどの絶世の美人に出会って一目惚れする」場合が多い。『燕山外史』の竇生と愛姑の出会いは、まさに才子が佳人に出会う典型であり、「奇遇」と考えにくい。一方、『舞姫』の豊太郎とエリスの出会いは、めったにないという不思議な「奇遇」とは異なるが、才子佳人が一目惚れするような出会いのパターンとも違う。

氏は、『舞姫』だけではなく、『雁』の岡田とお玉を「才子佳人」と見なし、二人の出会いを「奇遇」だとも論じている。才子像に着目すれば、岡田は美男子で、医科大学（東京大学医学部の旧称）の学生である。頭がよく文学趣味があり、ドイツ語が話せるし、漢文もすらすら読め、ドイツの教授に雇われるなどのことから、才能があると考えられる。しかし、佳人の造型から考えれば、『舞姫』のエリスと同じように、お玉が美しい人だと思われるが、教養のある女性とは考え難い。三味線が上手に弾けるので芸の才能はある。最初末造の注意を引いたのはお玉の三味線の音であった。また「あの子はあんな好い器量で、お師匠さんも藝が出来さうだと云つて褒めてお出だから、早く藝者の下地子に

お出し」（「第八巻」、五〇二頁）と、物分かりの良いお上さんにも誉められた。しかし、お玉の才能は作中で大きく強調されているわけではなく、むしろ容貌のほうが大いに重視されているのではないか。お玉も自分のことを「躾をも受けてゐない藝なし」（五五七頁）と認識している。また「學校は尋常科が濟むと下がつてしまつて、それからは手習をする暇も無かつたので、自分には満足な手紙は書けない」（五七五頁）とあるように、教養もない。こうした点は高い教養を持つ「佳人」とは大きく異なる。即ち、お玉は中国の「才子佳人小説」での「佳人」の形象とはずれが大きい。まして、先述した「奇遇」の概念から考えると、岡田とお玉との出会いは、奇遇とは言い難い。

四

また、重松泰雄氏も『舞姫』を「才子佳人の物語」を前提に考えている。[6] 氏は、鷗外初期の小説論「現代諸家の小説論を読む」の一節を引用し、「『舞姫』という作品は、まさに『心理的観察に依て始めて描写し得べき特殊の面目ある各箇人の才子佳人』の物語だった」と述べている。「現代諸家の小説論を読む」（『柵草紙』第二号、一八八九年十一月）は、鷗外の小説論の中で最もまとまったもので、諸家の論に問題提起をしながら、鷗外自身の小説論を詳しく述べている。しかし、まず、氏のいう「『特殊の面目ある各箇人の才子佳人』の物語」（傍点引用者）の語に留意したい。「抽象的理想主義」派の創作は実世界に反するがために、人物像が類型的になってしまうことを鷗外はこの小説論で批判している。「故に讀むものは巻中に於て、才子にも佳人にも逢ふことあるべしと雖も、その才子と佳人とは皆な是れ各一想の擬人法にて得たる理想的才子佳人にして、心理的観察に依て始めて描写し得べき、特殊の面目ある各箇人の才子佳人にあらず」（傍点引用者）という。鷗外が「抽象的理想主義」派の創作を批判したのは、人物像のパターン化という点である。つまり、ここで鷗外の指摘した「特殊の面目ある各箇人」のものは、作中人物像のことを指しているのであって、物語の全体や筋の展開までは言及していない。それから、氏は

「『特殊の面目ある各箇人の才子佳人』の物語」と述べているが、特殊であっても最小限の「佳人」の条件を満たしていなければ、『舞姫』そのものは「才子佳人小説」だとは言い難い。

「才子佳人小説」という文学的カテゴリーはもともと中国文学から来たものである。このように、先行研究においては、「才子佳人」の概念規定が日本的な理解によってなされている。特に「佳人」の造型に関しては、字面によるそれにとどまっている。しかし、ここまでの記述で明らかなように、鷗外は本来の中国古典文学における「才子佳人小説」の性質を正確に把握していた。

では、あらためて、才子の豊太郎の造型はどのような「特殊の面目」を持っているのか、この点に着目して、豊太郎の才子像を考え直したい。

昔中国における書生の典型は、殆ど地方の出身で親孝行で、家族の期待と功名のため、貧困な生活や逆境を乗り越えて勉学し、科挙に受かり高官になる道を歩むのである。『舞姫』の豊太郎も地方の出身で且つ親孝行で、立身出世のために勤勉に学問の道を進み、優れた学識、才能を見せている。「余は幼き比より厳しき庭の訓を受けし甲斐に、父をば早く喪ひつれど、学問の荒み衰ふることなく、旧藩の学館にありし日も、東京に出でゝ予備校に通ひしときも、大学法学部に入りし後も、大田豊太郎といふ名はいつも一級の首にしるされたりしに、一人子の我を力になして世を渡る母の心は慰みけらし」（四二六頁）とあるように、典型的な中国の書生像が提示されている。こうした立身出世のために勉学する書生の造型は、明治時代の典型的な書生像でもある。しかし、「余が幼き頃より長者の教を守りて、学の道をたどりしも、仕の道をあゆみしも、皆な勇気ありて能くしたるにあらず、耐忍勉強の力と見えしも、皆な自ら欺き、人をさへ欺きつるにて、人のたどらせたる道を、たゞ一条にたどりしのみ」（四二九頁）というように、豊太郎はドイツへ行き、西洋の文化に触れてから、今まで勉学してきたものやこれからの青雲の道に疑問を持ち始めた。「余は父の遺言を守り、母の教えに従ひ、人の神童なりなど褒むるが嬉しさに怠らず学びし時より、官長の善き働き手を得たりと奨ますが喜ばしさにたゆみ

なく勤めし時まで、たゞ所動的、器械的の人物になりて自ら悟らざりしが、今二十五歳になりて、既に久しくこの自由なる大学の風に當りたればにや、心の中なにとなく妥ならず、奥深く潜みたりしまことの我は、やうやう表にあらはれて、きのふまでの我ならぬ我を攻むるに似たり」（四二八頁）という。立身出世の道は普通の書生にとっては夢であり、当たり前の目標であるが、豊太郎にとっては不確定な道となり、背負わなければならない重荷となったのである。豊太郎はこの点において、中国の才子と大きな違いがある。

『雁』の岡田の才子像も才子と比べて一つ大きな違いがある。それは、岡田の武芸への関心である。岡田は文学趣味だけではなく、競漕の選手でもあったという文武両道の才子である。つまり、岡田の才子像は文武両道という特異性を持っている。

このように、人物造型だけからすれば、『舞姫』は即ち「才子佳人小説」とは言い難いが、そうした要素の入っている作品だとは考えられる。鷗外が「才子佳人小説」で注目した、恋愛に対する一途さや、男女の情の哀切激越と純情で情熱的な感情表現という点が『舞姫』にも見られるからである。エリスは豊太郎に対して自分のすべてを捧げるような深い恋愛感情を持ち、彼女の恋愛感情の表現は一途で情熱的である。エリスは、予想せず豊太郎に騙され捨てられた時、突然の衝撃と裏切られる悲痛で発狂してしまう。「我豊太郎ぬし、かくまでに我をば欺き玉ひしか」（四四六頁）と、ひどく傷付き悲しむ。発狂してしまうほどエリスは豊太郎に対して深い恋愛感情を持った。エリスは豊太郎に対して純情で情熱的で、一途であるという特質が見られる。豊太郎に対するエリスの純真な深い愛情の描写は、鷗外が「才子佳人小説」で感心した女主人公の「情之至」（愛情の至極）、「情致纏綿」（纏綿とする深い情愛）の表現に通ずると考えられる。一方、豊太郎にも深い恋愛感情を持つ側面が見られ、作品全体にエリスと結ばれぬ彼の後悔と懊悩が漂っている。善良で純情なエリスを裏切ってしまうせつなさと懺悔の気持ちや断腸の思いが繰り返され、心の葛藤が鮮明に描かれている。一方、『雁』においては『舞姫』のような男女の情熱的

で深い恋愛感情が見られない。

このように、豊太郎の才子像の一面を含め、男女の純情で相思相愛の深い恋愛感情の表現に着目すれば、確かに『舞姫』は「才子佳人小説」と重なる部分があると認められる。鷗外は自らの小説論で、「特殊の面目ある各箇人」の人物像を作るべきだと主張していた。それと対応したように、創作においてもパターン化された理想的な才子ではなく、「各箇人」の才子を作り出そうとしたのではないかと思われる。従って、『舞姫』そのものは「才子佳人小説」だとは言えないが、そうした要素の入った作品だと言える。

終わりに

このように、若き日の鷗外は、中国の「才子佳人小説」に関心を寄せ、そうした関心を自らの創作にも反映していることが明らかにできた。

従来、鷗外文学と「才子佳人小説」との関連についてあまり論究されたことがなかった。まして、奥野信太郎氏は「鷗外における中国文学の位置」(『群像』一九四八年七月）で、「鷗外と中国戯曲小説とは、さして深甚な関係のもとにあるものではない」と指摘している。しかし、本発表で検証してきたように、鷗外と明清の「才子佳人小説」との間に深い関わりがあったことは明らかである。

このように、特にドイツ（西洋）を舞台にした初期の創作『舞姫』『うたかたの記』は、中国の明清の「才子佳人小説」の性格を持つ作品だと考えられる。ここに近代と古典、東洋と西洋との融合の試みを見て取ることもできるのである。

[付記]
本発表原稿を草するに当たり、東京大学附属図書館より「鷗外文庫」閲覧の機会を賜ったことに御礼申し上げます。

［注］

①曹碧松「才子佳人小説的進歩意義和消極的意義」（『明清小説論叢１』春風文芸出版社、一九八四年五月）や程毅中「略談才子佳人小説的歴史発展」（『明清小説論叢１』春風文芸出版社、一九八四年五月）、陶応昌「容貌、才情与心霊―明清才子佳人小説中女性形象的審美意識」（『雲南民族学院学報』第十五期、一九八七年六月）と胡萬川『話本與才子佳人小説之研究』（大安出版社、一九九四年二月）などを参照。

②この書き入れを、前田愛氏は「鷗外の中国小説趣味」（『国文学　言語と文芸』三八号、大修館書店、一九六五年一月）において「近世髭眉丈夫之作、却是其無気骨、便小青見之、其謂之何哉。」と翻字した。しかし、鷗外の書き入れを正確に再現していないと見える部分があり、疑問に思われる。

③平岡敏夫『森鷗外　不遇への共感』（おうふう、二〇〇〇年四月）

④『燕山外史』とその原典とされる「寳生本伝」の主人公の名前は、「寳縄祖」であり、「寳生」と略称されている。しかし、氏は論文中最初から最後まで「寳生」を「宝生」に改め、疑問に思われる。「寳」と「寶」とは明らかに異なる文字である。

⑤李宗為『唐人伝奇』（中華書局、一九八五年十一月）や、呉季琪「唐人伝奇之創作方法及特色」（『古今芸文』二七巻二期、二〇〇一年二月）などを参照。

⑥重松泰雄『鷗外残照』（おうふう、二〇〇一年九月）

＊討議要旨

斎藤正志氏は、才子佳人小説の特色として三点挙げたが、それは自分の考えなのか、それとも他の研究論文からなのか、と発表者に尋ね、それに対して発表者は、その三点の特色は自分の考えではなく、中国文学の研究論文からまとめたものである、と答えた。

金子幸代氏は、次のように述べられた。作中の設定について考える必要がある。例えば、『うたかたの記』に「ローレライ」の絵のような役割を果たすものは、才子佳人小説に似たものがあるかもしれない。

松村雄二氏は、鷗外はむしろ才子佳人小説離れをしていたのではないかと述べた。発表者は、鷗外は才子佳人小説に影響を受け、それを自分の小説に反映させたのだと述べた。